糸球体硬化の強いものは，腎不全に移行し易いようである．WG の死因は，腎不全がへり，感染症がほとんどを占めている．寛解導入時の死亡が多く，免疫抑制薬，抗生剤の使い方の充分な検討が必要と思われる．

2）慢性関節リウマチに伴う肺病変

野沢　悟・小澤　哲夫（新潟県立瀬波病院内科）
星野　賢一・山崎　秀
石川　肇・中園　清
村澤　章（同　整形外科）
鈴木　栄一・荒川　正昭（新潟大学第二内科）

〔目的〕高分解能 CT を用いて，慢性関節リウマチ（RA）の肺病変を評価し，胸部単純X線像との比較検討を行う．

〔対象・方法〕1990 年 8 月から 1991 年 3 月までに瀬波リウマチセンターに入院した RA 症例 176 例に，問診，胸部単純X線，精密呼吸機能および動脈血ガス分析で異常を認めた74例（42%）に，肺高分解能 CT 検査を行った．

〔結果〕間質性病変，気道病変，胸膜病変は胸部単純X線と比べて，CT でより高率に認められた．間質性病変では線状・索状影が最も多くみられた。気道病変では通常のX線像では検出できない細気管支炎を思わせる末梢粒状影が認められた．CT 像の主病変で分類した RA 患者の背景因子（性別，年齢，罹患年数，病期，class）には差はなかったが，$AaDO_2$ は，病変なし群に比べて胸膜病変群に開大していた．

〔結語〕高分解能 CT は，RA の多彩な肺病変を評価するうえで有用であると考えられた．

## II．話　題　提　供

### Yersinia 感染症の細菌学と臨床
### （膠原病，自己免疫性疾患との関連をも求めて）

新津医療センター内科
金沢　裕 先生

1972 年以来 *Yersinia* の検出につとめ *Y. enterocolitica* 人起病型（Y. e.）77株と *Y. pseudotuberculosis* 3 株を検出した．

その検出率は幼児下痢症 15/487（3.1 %），回腸末端炎 13/32（41%），虫垂炎うたがいで開腹切除された虫垂からは 28/637（4.4 %），非感染性疾患開腹時切除虫垂からは 0/54 であった．Y 腸性虫垂炎例は年少者に，軟便排出者に多く，また回腸末端炎または腸間膜リンパ節炎併発例が少なからずみられ虫垂炎の多くは軽症（カタル性）であったが 1 例に穿孔がみとめられた．

一過性に軟便を伴い，Y. e. の分離された普通感冒様 2 症例，ペット犬からも同一菌型の Y. e. を検出しえた回腸末端炎の 1 例，遠足で谷川の水を飲んだエピソード後に風疹様発疹，高熱，腹痛で入院し Y. p. が分離された小学生例なども経験された．

結節性紅斑の 2 例から Y. e. が分離され，1 例には Y. e. 抗体の高度上昇があり計 3/13 に Y. e. 感染が証明された．うち頚部リンパ節の有痛性腫脹を伴った Y. e. 分離の 1 部は分離菌に高感受性を示した TC で菌は陰転化してもなお継続する高熱に対しステロイド剤が著効を奏しY抗原に対する免疫学的機序の関与が強く推定された．

下痢腹痛のエピソード数日後に甲状腺の自発痛を訴えて来院した腺腫様甲状腺腫の主婦例に Y. e. 感染が見出された．甲状腺の濾胞の上皮細胞の細胞膜と Y. e. の細胞膜に共通抗原の存在が証明されており，自己免疫性甲状腺炎と Y. e. 感染との関係が注目されている今日，示唆にとむ症例であった．

サルコイドーシス（新大 2 内伊藤博士提供）症例の 1/12 に人非病原性 Y. e. が検出されたが抗体価の上昇はみられなかった．

人動物分離株に reference 株を加えた Y. e. 70株，Y. p. 24株について化学療法剤感受性を検討し，両菌株とも AGs，CP，TC，SA，ST，キノロン剤には感受性を示した．β-lactam 剤には Y. e. は耐性を Y. p. は感受性傾向を示しその差は β-lactamase 産生に関係することが判明した．

なお人，動物分離株には SM，SA，TC，単独または多剤耐性株が Y. e. では17%に，Y. p. では28%にみられその一部には伝達性 R-plasmid の関与が証明された．

Y感染症は各科に関連を有し，第一線の臨床上もゆるがせにできない疾患と考えられ今後の研究の発展が期待される．

研究協力者

藤巻茂夫・長谷川健次郎・影山正歩・泉　外美・霜越信・田辺尚雄・森内正名・橋本芳孝・池村謙吾・重野直也・倉又利夫・久保　緑・市井吉三郎・伊藤慶夫